



園だより

第10号

平成31年1月29日

駿河台大学第一幼稚園

園長 田所 恒子

まね 真似ることは学ぶこと

全国的にインフルエンザが猛威をふるう中、本園でも流行が心配されました。しかし、感染が拡大しないようお休みいただくなどご協力をいただいたおかげで現在は小康状態となりました。収束することを祈る毎日です。

さて、「真似」は「学び」の語源であると言われています。ある日、私は、園庭でこま回しを楽しんでいる年少児の仲間に入れてもらいました。「見て！回るよ」と一人が私に回して見せると、次々と同じように回して見せてくれます。みんなこまを上手に回せるようになっていました。そこで、私は「きのこ回して言うんだよ」と、こまの逆さ回しをして見せました。「どうやったの？」と目を輝かせて、自分もやってみたい、と真似をしようとする子どもたちに、何回か回して見せました。すぐコツを掴んで回せる子どももいますが、大半はうまく回せません。こまを放すタイミングが難しい様です。そのうちに、A児は「1, 2, 3」と言いながらこまを回し始めました。同じように回したいという強い気持ち、繰り返し取り組む意欲となり、そして「1, 2, 3」と言うことで、こまを放すタイミングがつかめることを発見したのです。真似るだけに終わらず、新たなものを創り出した姿に、真似ることは、学びだと強く感じました。

2月9日の展覧会に向けて、年中児が空き箱で動物を作っています。体と脚、首などを接着する時、箱と箱のように面がある場合は糊付けがしやすいのですが、脚をトイレットペーパーの芯で作りたい子どももいて、どの様に接着するか大変悩んでいました。担任は、芯に切り込みを入れて糊しろを作り脚を体に付けて見せました。子どもたちは「いいねえ」と言い、その方法を真似て切り込みの深さや数なども試しながら脚を体につけていきました。その結果しっかりと四本の脚が立ちました。今回は芯の脚が必要でなかった子どもたちもいつか必要となった時には、友達の取り組みを見ていた経験からこの方法を思い出し、製作活動をより楽しめるようになることでしょうか。

これまで誕生会の「出し物」は、教師が季節や子どもたちの生活を考え、遊びや生活が楽しくなるような内容を選択してきました。今回は、子どもたちの日頃の遊びの中から、年長児の「ライブ」を出し物に決めました。最初は、遊戯室に巧技台を並べ舞台作りを遊んでいた子どもたちでした。日に日に遊びが深まってきて、大好きな映画や昨年引退した歌手を真似た「ライブごっこ」が始まりました。登園時は、「今日、ライブするから来てね」と私に声を掛けてきたり、券を作りお客さんに配ったり、歌をみんなで作ったりして準備する姿も見られました。衣装を身に付け、歌ったり踊ったりする姿はまるでスターのようです。やりたいという気持ちはこんなにも大きな力となるのです。客席の子どもたちも真剣に見入っていました。子どもたちがあこがれ、「真似をしたい」と思える出し物であったと思います。

これまで「学ぶこと」は教師から一方的に「教えてもらうこと」と考えられる傾向がありました。しかし、これからの時代には、子どもたちが身の回りのことに興味や関心をもって主体的に関わり、考え、工夫しながら新しい答えを出していく教育が大切になります。子どもたちの心が揺さぶられ、自分も真似てやってみたい、出来るようになりたい、そんな意欲をわきたてるような学びの多い幼稚園にしたいと思います。



年中児を真似て年少児が「毒リングゲーム（円形ドッジボール）」を先生や友達と楽しむようになりました。ボールの投げ方やルールをよく見ていて、真似ています。



友達のしていることが見えたり、一緒にこま回しを楽しんだりすることができるように、教師は、こま回しの板を園庭に設置しています。



先生や友達の姿を見ながら、自分の作る動物にはどう脚をつけたら良いか、工夫しています。



誕生会での「ライブ」は、観客の子どもたちの「真似をしたい」気持ちを高めるとてもすてきな、楽しい出し物でした。